

NAKANO LIBRARY

東京工芸大学中野図書館報

TOKYO POLYTECHNIC UNIVERSITY

24





表紙



扉



p.16 CHRYSANTHEMUM



p.67 LARKSPUR

『The William Morris hand printed collection』 Sanderson 1963年

「アーツ・アンド・クラフツ」運動の提唱者にして近代デザインの先駆者といわれるウィリアム・モリス William Morris (1834-96) は、壁面装飾や家具デザイン、ステンドグラスなどの室内装飾全般にわたる仕事を展開して成功したことで知られます。

本学図書館には、モリスのグラフィックデザイン関係の貴重な資料が収蔵されています。その一つがここに紹介するサンダーソン社刊行のデザイン集です。

モリスの最初の壁紙デザインは 1863 年にジェフリー社から発表されましたが、それらは 1930 年にサンダーソン社所有となり、その後 1963 年、モリスのデザイン発表 100 周年記念のおり同社より本書として刊行されました。

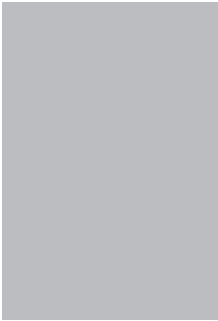
熟練した印刷職人によって一つ一つ丁寧に手仕事でプリントされた図版はどれもそのオーガニックな図柄や色合いをデリケートな部分まで伝えるものになっています。たとえば“CHRYSANTHEMUM”（16 ページ）です。これは、モリス自身の制作したデザインをオリジナルカラーで再現しますが、既知のものでもあらためて見れば、初見のような新鮮さをおびています。

本書に掲載のモリスの仕事は、室内装飾の分野で成功したモリスがデザイナーとして、そして芸術家としても抜きん出た才能の持ち主であったことを如実に証言するものです。

本邦におけるその図書館収蔵が本学図書館以外に確認されないという点でも本書は特筆に値する資料であり、また写真、印刷、デザイン、そしてメディアアートの今日的発展までをカバーする本学の教育研究にとってその収蔵を誇れる貴重な書物だといえます。

中野図書館長 小川真人

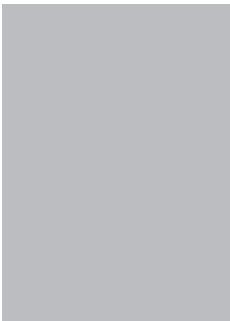
フランス人のみた明治日本



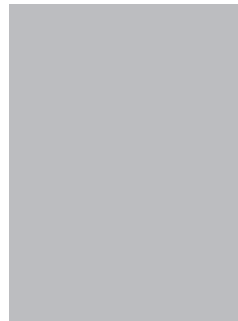
表紙



p.4 写真



扉



p.255 図版

『Excursions au Japon』 G. Goudareau 著 A. Picard et Kaan 1889 年

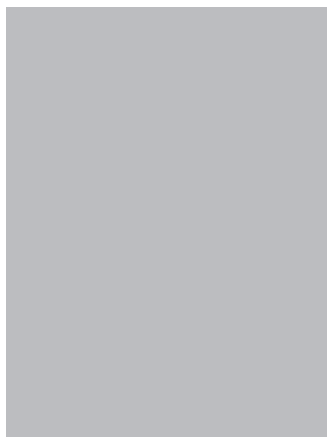
本学中野図書館には、明治期に来日したフランス人ギユスターヴ・グダローによる、明治期日本の見聞録をおさめた“Excursions au Japon”（邦訳書名『仏蘭西人の駆けある記—横浜から上信越へ』）のフランス語原書が収蔵されております。これは1889年にパリで刊行の初版本です。

グダローは、横浜を出発して前橋まで電車で行き、清水峠を越えて長岡を經由して新潟に着きます。ここで彼は石油などの資源を含めた調査をおこなっています。その後、直江津に下り、北国街道を通り、長野、上田、軽井沢を經由して、碓氷峠をぬけて、横川から電車で帰京しています。

この道中で彼が見聞した自然風景や人びとの姿、社会風俗などの写真、絵、図案等があります。写真を元にした風景画など多い印象ですが、歴史的記録としても興味深いところです。

グダローは1897年にGérant du Consulatの職名のもと着任した記録があり、フランス領事館事務代理に任官したようですが、詳細は不明です。その実務的な記述は本書の特徴でもあります。本書序文でグダロー自身が、来日して15年後に相当する1889年に本書出版に至ったことを述べていますが、日付が詳細に記載されるものの、この旅行をいつたい何年におこなったのか、明記がありません。しかし、日本の1885年のコレラ流行の記述などからして、グダローの旅行は1886年だったと推定されます。

本書は、明治時代にフランスの外交官が見聞した日本の記録として貴重であるばかりでなく、その原書初版収蔵は本学図書館にとってたいへん意義あるものです。



『人間の記憶』
須田一政 クレオ 1996年

「起源にある^{ヴィジョン}視覚、われわれの知らないままに、われわれのうちでおのれを見ているものを再発見する」。フランスの哲学者モーリス・メルロ＝ポンティの言葉をエピグラフとするこの写真集は、スナップショットにこだわり続けた写真家、須田一政（1940-2019）の集大成といってさしつかえないだろう。

この写真集は潔い。250ページを超える写真集でありながら、冒頭のエピグラフのほか、見開き2ページにレイアウトされた須田自身によるエッセイ、掲載写真の情報一覧とプロフィール、写真以外のものはわずかにそれだけである。これらをあわせても6ページ、それに対して写真は優に250点を超える。つまり、先に挙げたページを除くほぼすべてのページが写

真によって埋め尽くされているということである。

この写真集を出すにあたり、須田は出版社の赤平寛三とデザイナーの鈴木一誌とともに、彼が30年にわたって撮り続けてきたものすべてを見返してセレクトしたという。しかしながら、本書は須田にとっての処女作ではない。『風姿花伝』や『須田一政・わが東京100』、『犬の鼻』などすでに数冊の写真集で世に問うてきた。そのうえで、既発表、未発表を問わずこれまでの写真を再構成し一冊の写真集として取りまとめたのである。とはいっても、それは何年頃はこのような取り組みをしていましたよ、何歳頃はこんなスタイルでしたよ、といった具合に作家の変遷を確かめるような性格のものではない。このことは、掲載作品それぞれの撮影場所が明かされている反面、撮影年についてはすべて伏せられたままであることが証左となる。

若く、経験の浅い須田がまなざしシャッターを切ったものと、身体の衰えを知り、さまざまな経験を重ねた須田がまなざしシャッターを切ったものとが隣り合って提示される。

『人間の記憶』とは、須田が折りに触れこれまでにとりまとめてきた個別のテーマや編集方針を越えた、彼自身ですら無自覚な自らのまなざしの在り処そのものをあぶり出す試みなのである。当然のように時代は変わり、環境も変わり、作家の関心事も、喜びの在り処も変わる。それにもかかわらず、もしも変わらないまなざしがあるとすれば、それはどのようなものか。しかしその問いは、須田だけに向けられたものではなく、ひるがえって写真集を見る私たち自身への問いかけとなる。

トリュフォーとの出会い

トリュフォーの訃報を聞いたのは確かまだ大学生の時であった。

東京近郊とは言えもう町に映画館など存在することのなくなった世代に生まれた私にとって高校生時代は月に一本程度近くの大きな町にて有名なハリウッド映画を娯楽として鑑賞する程度であった。

大学を映画学科に選択した自分にとって東京の映画事情はまるで迷路に入り込んでしまった感じであった。周囲がエリセやタルコフスキー、アンゲロプロス等を論争している中まるでよちよち歩きの赤ん坊の様に手探りで映画を観る日々を送っていた。

そんな中で出会ったフランソワ＝トリュフォーという監督とその作品群。映画の中の登場人物とは強く逞しい超人的なヒーロー像で作り上げていたハリウッドの映画に対して己れの気丈の弱さを嘆いていた自分に「こういう人間たちも存在し映画の主人公になるんだ」と思わせてくれたのが彼のシリーズ作の主人公アントワール＝ドワネルであった。

またトリュフォーの描く映画の中の文学的素養やその面影も自分の性に合った感があった。

映画の素養の無かった（現在でもそう思っているが）時期、トリュフォーを通じて映画の魅力の片鱗を伺い知り始めたその折での彼の訃報。授業中に教授が彼の死去を受講していた学生たちに知らせてくれた。

後年、パリへの旅行の際、彼の墓に来訪した。クリスマスの時期、シンプルな墓石に小さなリースが置かれてあったのが印象的であった。

その後、本書籍の出版。彼の葬儀から始まる第一章。これ自体が既に映画のような展開で構成。実は本書は彼が長編第一作『大人は判ってくれない』（1959）までの伝記的体裁の物語。紆余曲折の少年時代。後々の実作の作風には似つかわしくないアグレッシブな批評家時代。スリリングな展開に休むことを惜むように当時たった一晩で読んでしまった記憶が蘇る。

本書の魅力をもう一つ。それは執筆者山田宏一氏の文章。

フランスへの渡航後、「カイエ・デ・シネマ」執筆が象徴されるようなヌーヴェル・ヴァーグの奇才たちの交流。その慎ましやかで温かみのある人間関係が滲み出るような文章。

博学で知識豊富な氏の教養は決して学究的な傲慢さに陥ることなく映画ファン、シネフィルの位置を越境することなく謙虚な視線を送り続ける。「硬」と「軟」の巧みさは決して専門家、一般読者双方を飽きさせることはない。

還暦を迎えたこの時期での本書の再読。大学教授などといった傲慢さを戒め今一度あの当時の無知の田舎学生に立ち戻ることを自分に悟らせてくれているかのようだ。



『トリュフォー ある映画的人生』
山田宏一 平凡社 1991年

古来、日本語の文章にはそもそも句読点や記号は存在しませんでした。諸説あるものの、「書物を読むのは教養のある貴族や武家など一部の階級に限られていたので、無用であった」と一般的には推測されています。江戸時代後期になり、文化・文政年間に庶民階級が滑稽本や瓦版を日常的に読むようになると、読点らしき印が読みやすさのために発行者の配慮で導入された痕跡があります。明治時代に西洋の書物が大量に流入すると、カンマやピリオドを用いた欧文を参考に日本語向けの句読点やかっこなどが本格的に作られ、その後定着したようです。

インターネットを利用して文章を受発信する機会が増えた現代、記号や符号には新たな機能すなわち個性の表現なども加わりつつあります。この辞典には現在広く使われるものを中心に 200 の記号・符号・しるし

『句読点、記号・符号活用辞典。』
小学館辞典編集部 編 小学館 2007 年

が収録されています。その記号などの読み方、規範的な意味・用法はもとより新しい用法も解説されています。本来の標準的な意味・用法からその後の進化まで含めた解説がとても有益です。また画期的なことにキーボードによる入力方法の紹介も全項目について掲載されており、パソコンユーザーに対する便宜も図られています。

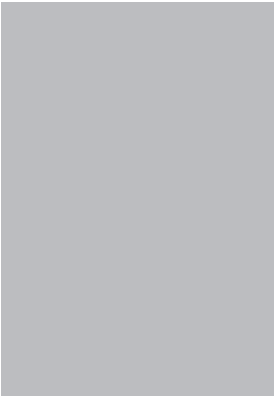
試しに「々」の欄をのぞいてみると「どうのじてん（同の字点）」と読むこと、入力の際には「どう」、「おなじ」、「くりかえし」などを入力→変換→選択することに加え「同じ漢字が同音または同訓で繰り返される時、第 2 字に代えて用いる符号。」と意味が掲載されています。用例として「人々」、「^{じきじき}直々」、「^{うんぬん}云々」などが紹介されたうえ、「常用漢字字体表」、「大会会場」のように同じ字が繰り返される場合でも、2 語にわたる字の重なりには使わないという注意事項も出ています。

こうした文章に使用する記号や符号の総称は「約物（やくもの）」と呼ばれています。「文章の約束事」に由来する呼び名ということですので、文章作成の際には本書をその座右に置いて、その都度正しい使用方法を確認するようにはいかがでしょうか。また何気なく開いたページの内容から「なるほど」という発見も期待されます。

基礎教育 教授 高木聖

『ミッキーマウス名作漫画集Ⅰ・Ⅱ』 エグモント・ジャパン 1998年

山下三千代



ミッキーマウスの新聞連載漫画は、ディズニー自らの監修の元、1930年2月より始まりました。

そして同年5月には漫画家フロイド・ゴットフレッドソンが作画として抜擢され、以降1975年10月に彼が引退するまでの45年もの長い間、彼とそのスタッフたちはミッキーマウスを描き続けたのです。

そんな連載漫画の代表的な作品が、エグモント・ジャパン社の編集のもと、ミッキーマウス生誕70周年を記念し、日本向けに翻訳出版されたのは1998年のこと。

現在でも、漫画作品集として日本語訳されたものは他には見られないようですので、貴重な存在といえるでしょう。

漫画の中で彼は、ミニーやグーフィーなどお馴染みの仲間たちと共に冒険に出かけ、幽霊船や宇宙人と遭遇したり、泥棒をやっつけたりと、数々の事件やアクシデントに立ち向かっています。

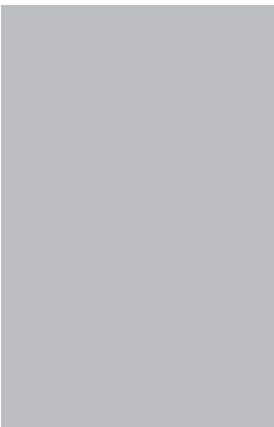
やんちゃで好奇心旺盛な活躍ぶりのミッキー。

ディズニーランドのシンボリックキャラクターとしてのイメージが強いであろう日本では、新鮮に感じられるかも知れません。

アメリカのカートゥーンアニメの歴史の一端を知るためにも参考になる本書。ぜひご一読を！

『さよならは小さい声で』 松浦弥太郎 清流出版 2013年

荒井祐美子



みなさんが思い浮かべる“すてきなひと”とは、どのような人でしょうか？身近にいる人や、街ですれ違った人…“すてき”と思うポイントはそれぞれ違うかもしれませんが、きっと思い浮かべる顔があると思います。

本書は、雑誌「暮しの手帖」の元編集長である松浦弥太郎さんが、これまでに会った“すてきなひと”をテーマに書いたエッセイです。何でもない生活の美しさを教えてくれた人、朝のバス停で顔を合わせる挨拶上手な人、言葉や手紙で素直に気持ちを伝えることができる人…。それぞれとの思い出を交えながら、著者が考える“すてき”とはどういうことなのか、さらには、心豊かに暮らすためのヒントなどが丁寧に書かれています。紡ぎだされた言葉には、凜とした美しさがあり、読み進めていくにつれて、背筋がすっと伸びる思いがします。また、本文に添えられた著者撮影の写真が、本書をより一層魅力的にしています。

日々の暮らしのなかで迷ったり悩んだりしたとき、そんなときこそ、本書は行く先を照らしてくれる道しるべのような一冊になると思います。ぜひみなさんに。

今後の展示予定

●2023 年度図書館報展



開館日時

通常期

月～金／9:00～20:00 土／9:00～17:00 日・祝祭日／休館日

夏季・冬季・春季休暇

月～金／9:00～17:00 土・日・祝祭日・一斉休暇／休館日

- 中野区在住・在勤の方は、カウンターにて手続き(身分証確認など)のうえ、図書・雑誌の閲覧と、著作権法に定められた範囲で複写ができます。
- ご来館の際は、ホームページなどで開館日時を事前にご確認ください。



2023年11月発行

東京メトロ丸ノ内線、都営地下鉄大江戸線、「中野坂上」駅下車、1番出口から徒歩7分

表紙イラストレーション：渡部飛日

【Name】: Hyuga Watanabe 【Blood type】: AB 【Date of birth】: July 31, 1998
【Birthplace】: Chiba 【Education】: Department of Design, TPU - Taniguchi and Endo Laboratory.
2021年東京工芸大学芸術学部デザイン学科卒業後イラストレーターとして活動。
同年度、玄光社「The Choice」年度優秀賞受賞。その他受賞歴多数。趣味は得意じゃないけどけん玉。

作品タイトル「a-n」

作品コメント：この世の五十音は“あ-ん”だけじゃありません。“a-n”の場合もあり、“a-z”だってあります。

東京工芸大学 | 中野図書館

164-8678 東京都中野区本町2-9-5

tel 03-5371-2733

<https://www.t-kougei.ac.jp/library/>

